

研究報告

断酒会入会者を対象とした調査（その1）：婚姻状況と飲酒による問題行動

杉山敏宏¹⁾、片岡睦子²⁾、谷岡哲也³⁾、
橋本文子⁴⁾、片山秀史⁵⁾、吉田精次⁶⁾

¹⁾足利短期大学看護科, ²⁾独立行政法人善通寺看護学校, ³⁾徳島大学医学部保健学科,

⁴⁾徳島文理大学保健福祉学部看護学科, ⁵⁾医療法人第一病院, ⁶⁾医療法人あいざと会 藍里病院

要 旨

背景：アルコール依存症では、支えとなる婚姻の有無が、問題行動に大きな影響を与え、それが治療方針や予後を決定する因子となることが多い。

目的：本研究では、婚姻の有無がアルコール依存に関連する問題と断酒継続にどのような影響を与えるかについて検討した。

方法：調査対象者は断酒会会員294人を調査対象とした。回収率は56.8%（167名：男性150名、女性17名）であった。調査内容は、婚姻の有無に加え、①飲酒による問題行動（飲酒で喧嘩・警察沙汰になった）の有無、②飲酒による対人関係の崩壊の有無、③アルコール依存症の認知の有無、④現在の節酒の可能性の有無、⑤機会飲酒（冠婚葬祭・会合等）の経験の有無、⑥断酒会に入会する前の断酒の経験の有無、⑦断酒後の生活の変化、⑧スリップ（再飲酒）の経験の有無、⑨飲酒欲求の有無、⑩問題飲酒の経験の有無、⑪断酒会以外への所属状況であった。

結果：飲酒による問題行動（飲酒で喧嘩・警察沙汰になった）（ $\chi^2=3.98$, $P<0.05$ ）、断酒会以外への所属状況（ $\chi^2=4.00$, $P<0.05$ ）では、未婚者が有意に多かった。

結論：既婚者の場合には、配偶者が飲酒による問題行動を警察沙汰にまでしないように制止もしくは緩衝する役割を果たしていると推察された。また未婚者は断酒を日々継続していく生活の工夫として断酒会以外の他の組織にも所属していると推察された。

キーワード：婚姻、アルコール依存症、断酒例会、断酒

はじめに

人はアルコールという飲み物を嗜好品として身近に置いて重宝してきた¹⁾。アルコールには、人間を楽しい気分にさせ、活気づかせる不思議な力がある²⁾。また、アルコールは精神に働きかける物質であるため、問題を解決したり、社会でうまくやっていけるような気持ちになったり、酒を飲んだほうが何かを達成できるような気

持ちになる場合がある^{3,4)}。

しかしアルコールは薬物としての面も持ち合わせ、長期飲酒や大量飲酒は依存性を高め、身体依存や精神依存を引き起こす作用がある。また、中枢神経系の働きを鈍らせ、自制心や緊張感が解放され、大量飲酒により気分を安定させるセロトニンが減少し、軽うつ状態、不眠、だるさ、不安感、集中力低下といった症状が出現する^{5,6)}。飲酒の仕方を誤った場合には、気分が高揚し、過剰な行動や人間関係の破壊、夫婦関係の崩壊、家族の破壊、経済的な問題の発生、仕事・社会への悪影響など仕事や家庭における深刻なさまざまな問題を引き起こす場合もある⁷⁾。

アルコール依存症と夫婦関係に着目すると、アルコー

2008年5月27日受付

2007年9月10日受理

別刷請求先：杉山敏宏、〒326-0808 栃木県足利市本城3-2120
足利短期大学看護科

ル依存症では別居もしくは離婚の可能性が少なくとも一般人口の約4倍あり⁸⁾、夫の暴力や問題飲酒が、妻の夫婦関係への不満と離婚の決心につながっていることが指摘されている⁹⁾。さらに夫婦関係の崩壊の危険な兆候として、アルコール消費量の多さも指摘されている¹⁰⁾。

アルコール依存症では、支えとなる婚姻の有無が、問題行動に大きな影響を与え、それが治療方針や予後を決する因子となることが多い¹¹⁾。国内では断酒会員の結婚に対する満足度を調査したものがあるが¹²⁾、婚姻の有無と飲酒による問題行動との関連を調査したものは見あたらない。そこで婚姻が飲酒による問題行動と断酒継続に関係しているかを分析することで、今後の断酒会会員の家族支援のあり方を探索するために調査を行った。

目 的

本研究では、筆者らが先に報告した調査結果¹³⁾を基に、婚姻の有無がアルコールに関連する問題と断酒継続にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。

調査方法

1. 調査対象者

A 県中央部の a 断酒会, b 断酒会, B 県東部に位置する c 断酒会, 同じく B 県北部山間部の d 断酒会に所属する断酒会会員294人を調査対象とした。回収率は56.8% (167名: 男性150名, 女性17名) であった。

調査対象者の平均年齢は 58.6 ± 11.1 (mean \pm SD) (男性 59.7 ± 10.5 , 女性 48 ± 11.7) 歳であった。初回飲酒年齢は平均 18.4 ± 6.3 歳であり, 15歳未満が男性28名, 女性5名であった。飲酒歴は平均 25.4 ± 11.3 年 (男性26.4 年, 女性16.5 年) であった。平均断酒期間は10年1ヵ月 \pm 9年6ヵ月 (男性10年7ヵ月, 女性4年6ヵ月) であった。既婚者は136名 (81.4%), 未婚者は26名 (15.6%), 未記入の者5名 (3.0%) であった。なお, ここでいう既婚, 未婚は, 非調査者にアンケートで「1. 既婚, 2. 未婚」の選択肢を示し, 回答者が判断した婚姻状態のことである。

2. 調査方法

調査用紙は, 事前に各断酒会長の許可を得た上で, 郵

送もしくは断酒会役員に直接手渡しして配布した。

3. 調査内容

質問内容は, 年齢, 性別, 初回飲酒年齢, 飲酒歴, 断酒期間, 婚姻の有無に加え, ①飲酒による問題行動の有無, ②飲酒による対人関係の崩壊の有無, ③アルコール依存症の認知の有無, ④現在の節酒の可能性の有無, ⑤機会飲酒 (冠婚葬祭・会合等) の経験の有無, ⑥断酒会に入会する前の断酒の経験の有無, ⑦断酒後の生活の変化, ⑧スリップ (再飲酒) の経験の有無, ⑨飲酒欲求の有無, ⑩問題飲酒の経験の有無, ⑪断酒会以外への所属状況, について調査した。

4. 調査期間

2005年6月中旬から2005年8月末であった。

5. 分析方法

各調査項目について, クロス集計を行い, χ^2 検定もしくはイエーツ補正の χ^2 検定を行った。なお, 有意水準は5%以下とした。

6. 倫理的配慮

断酒会場に足を運び, 断酒会会員に研究の意義と目的, および個人が特定されないように十分にプライバシーには配慮することや, 研究以外には調査結果を用いない旨説明した。郵送での返送をもって同意が得られたものとした。

結 果

飲酒による問題行動の有無 (酒で喧嘩や警察沙汰になった) について分析した結果, 既婚者で経験があったと回答した人は65人 (48.8%), 未婚者は17人 (73.9%) であり, 未婚者が有意に多かった ($\chi^2=3.98$, $P<0.05$) (表1-a)。

飲酒による対人関係の崩壊 (人間関係がまずくなった) の有無では, 既婚者で経験があったと回答した人は74人 (57.4%), 未婚者は18人 (75%) で有意差はみられなかった ($\chi^2=2.63$, $P=0.11$) (表1-b)。

アルコール依存症の認知について分析した。既婚者でアルコール依存症と認知していると回答した人は121人 (91.7%) で, 未婚者は23人 (95.8%) で有意差はみられなかった ($\chi^2=0.50$, $P=0.48$) (表1-c)。

表1 婚姻状況と飲酒関連問題・断酒継続との関係

質問項目					
	現在の婚姻状態	はい n (%)	いいえ n (%)	χ^2	P
a. 飲酒による問題行動の有無 (n=156)	既婚 未婚	65(48.8) 17(73.9)	68(51.2) 6(26.1)	4.93	0.046
b. 飲酒による対人関係の崩壊の有無 (n=153)	既婚 未婚	74(57.4) 18(75)	55(42.6) 6(25)	2.63	0.105
c. アルコール依存症の認知の有無 (n=156)	既婚 未婚	121(91.7) 23(95.8)	11(8.3) 1(4.2)	0.5	0.773
d. 現在の節酒の可能性の有無 (n=132)	既婚 未婚	13(11.6) 1(5)	99(88.4) 19(95)	0.23	0.624
e. 機会飲酒(冠婚葬祭・会合等)の経験の有無 (n=108)	既婚 未婚	19(21.1) 5(27.8)	71(78.9) 13(72.2)	0.39	0.535
f. 断酒会に入会する前の断酒の経験の有無 (n=161)	既婚 未婚	119(88.1) 20(76.9)	16(11.9) 6(23.1)	2.33	0.127
g. 断酒後の生活の変化 (n=142)	既婚 未婚	95(78.5) 15(71.4)	26(21.5) 6(28.6)	0.51	0.473
h. スリッパ(再飲酒)の経験の有無 (n=152)	既婚 未婚	63(50) 16(61.5)	63(50) 10(38.5)	1.15	0.284
i. 飲酒欲求の有無 (n=143)	既婚 未婚	65(54.6) 17(70.8)	54(45.5) 7(29.8)	2.15	0.143
j. 問題飲酒の経験の有無 (n=131)	既婚 未婚	84(77.1) 16(72.7)	25(22.9) 6(27.3)	0.19	0.662
k. 断酒会以外への所属状況 (n=137)	既婚 未婚	9(7.9) 5(21.8)	105(92.1) 18(78.2)	3.99	0.045

現在の節酒の可能性の有無については、既婚者で、節酒できると回答した人は13人(11.6%)で、未婚者は1人(5%)であり、有意差はみられなかった($\chi^2=0.23$, $P=0.63$) (表1-d)。

機会飲酒(冠婚葬祭、会合等)の経験では、既婚者で機会飲酒の経験があると回答した人は19人(21.1%)で、未婚者は5人(27.8%)で有意差はみられなかった($\chi^2=0.39$, $P=0.53$) (表1-e)。

断酒会に入会する前の断酒の経験では、既婚者で断酒の経験があると回答した人は119人(88.1%)で、未婚者は20人(76.8%)で有意差はみられなかった($\chi^2=2.33$, $P=0.13$) (表1-f)。

断酒後の生活の変化では、既婚者で断酒後の生活が良かったと回答した人は95人(78.5%)、未婚者は15人(71.4%)で有意差はみられなかった($\chi^2=0.51$, $P=0.47$) (表1-g)。

スリップ(再飲酒)の経験では、既婚者でスリップ経験があると回答した人は63人(50%)、未婚者は16人(61.5%)で有意差はみられなかった($\chi^2=1.15$, $P=0.28$) (表1-h)。

飲酒欲求の有無について分析した結果、既婚者で飲酒欲求があると回答した人は65人(54.6%)、未婚者は17人(70.8%)で有意差はみられなかった($\chi^2=2.15$, $P=0.14$) (表1-i)。

問題飲酒(二日酔いで欠勤する等)の経験の有無では、既婚者で問題飲酒をしたことがあると回答した人は84人(77.1%)、未婚者は16人(72.7%)で有意差はみられなかった($\chi^2=0.19$, $P=0.66$) (表1-j)。

断酒会以外への所属では、既婚者で断酒会以外に所属していると回答した人は9人(7.9%)、未婚者は5人(21.8%)であり、未婚者が有意に多かった($\chi^2=3.99$, $P<0.05$) (表1-k)。

考 察

飲酒による問題行動については、結婚の有無によって特徴的な差があるのではないかと考えていた。しかし既婚者より未婚者が有意に多かった項目は、飲酒による問題行動(酒で喧嘩や警察沙汰になった)と断酒会以外への所属状況の2項目であった。

未婚者では飲酒による喧嘩は、私的な場での家庭内よりも公共の場としての酒場等で起こることが多いのではないかと推察される。公共の場では、喧嘩の仲裁者に警

察が入ることがあるため、警察沙汰になりやすいのではないかと推察される。

長期に飲み続けているアルコール依存症者の周りには、飲み続けることを可能にしている人(イネイブラー)が存在する場合がある。既婚者の場合には、配偶者がイネイブラーとして対応することが考えられる。配偶者が飲酒による問題行動を警察沙汰にまでしないように制止し、緩衝する役割を果たしていると推察される^{14,15)}。

次に断酒会以外への所属では、未婚者が有意に多かった。断酒を継続するためには本人だけでなく家族・支援者の存在が必要不可欠である^{16,17)}。断酒会では家族に支援者の役割を期待され、断酒会例会への家族同伴参加がみうけられる。家族は断酒継続の支援者であり、アルコール依存症者と家族の凝集性を強化することで断酒継続の可能性が高くなる。既婚者の場合、本人と配偶者が断酒継続という共通目標を持ち、家族間の凝集性も高まれば断酒会例会以外の場でも、精神的な関わりも安定し断酒継続に良い効果を与えている可能性がある。

大野は、「断酒会に参加している夫婦の結婚満足度は、断酒会に参加することで自己を受容し、他人を助けることで、結婚満足度を高める可能性がある¹⁸⁾」と指摘している。断酒会の中で、家族ぐるみでの断酒の取り組みがみられるが、家族で心の悩みを共有し合うこと、また冠婚葬祭等の対応方法に関しても酒宴などには、家族に代理出席してもらうなどを学ぶ。また方は「断酒会で家族関係を深める場の中で、配偶者をはじめ家族も発言を行うため、家族の思いを相互に知らされ、すぐには夫婦関係を修復できないが、ともに会に参加することで互いの理解を深める¹⁹⁾」と述べている。つまり断酒会が、断酒のためのさまざまな情報交換の場となっていると考えられる。

一方、未婚者は断酒の支援者を断酒会以外の場にも求めている可能性がある。未婚者は断酒会例会が毎日どこかで開催されていないのであれば、その空白日を断酒会以外の組織に所属することで断酒会以外の仲間ともつながりながら断酒継続をしていると推察される。すなわち断酒を日々継続していく生活の工夫として他の組織にも所属していると推察された。

有意差が認められなかった調査項目は、②飲酒による対人関係の崩壊の有無、③アルコール依存症の認知の有無、④現在の節酒の可能性の有無、⑤機会飲酒(冠婚葬祭・会合等)の経験の有無、⑥断酒会に入会する前の断酒の経験の有無、⑦断酒後の生活の変化、⑧スリップ(再

飲酒)の経験の有無, ⑨飲酒欲求の有無, ⑩問題飲酒(二日酔いで欠勤する等)の経験の有無であった。

アルコール依存症の認知の有無, 現在の節酒の可能性の有無, 断酒後の生活の変化, 飲酒欲求の有無などについては, 有意差はなく, 断酒会への参加が断酒継続のために重要であることがあらためて確認された²⁰⁾。

断酒の支援の強化として, 配偶者が緩衝する役割を果たしていること。また未婚者については, 断酒をするための仲間が必要であることを考慮して看護する必要がある。

しかし, 配偶者のイネイブラーの問題や断酒仲間が飲酒機会の仲間になるおそれがあることも看護の課題であると考え。

本研究の限界として, 対象者の性別, 既婚・未婚の人数に偏りがあった。そのため本研究を発展させていくためには, 男女別の偏りを少なくしていく必要があると考える。

おわりに

断酒会に参加しているメンバーを対象として, 飲酒による問題行動に結婚が影響を及ぼしているかを調査した。今回の調査では, 飲酒による対人関係の崩壊については, 職場関係や友人を対象としており, 配偶者同志の関係の崩壊については調べていない。

本研究の限界として, 今後は未婚者の離婚の有無や既婚者の再婚の有無についても調べていく必要がある。また, 今回は断酒会に参加しているメンバーを対象として調査を行ったが, 同じような断酒に関連した自助グループのAA (Alcoholics Anonymous) についても調査を行い, 婚姻の有無と飲酒による問題行動との関連を明確にしていきたい。

謝 辞

本研究に際し, ご協力いただいた各断酒会の皆様, 及び各関係者の皆様に深謝致します。

引用・参考文献

- 1) 平山宗宏, 石井裕正, 高石昌弘: ハンドブックアルコールと健康, 17, 社団法人アルコール健康医学協会, 2005.
- 2) ニック・ブラウンリー, 山川健一 監修, 小林千枝子翻訳: 悪魔か天使かアルコール, 156, 太田出版, 2005.
- 3) 前掲書2): 159-160.
- 4) ジャン＝シャルル・スルニア, 本多文彦 監修, 星野徹・江島宏隆訳: アルコール中毒の歴史, 9-14, 法政大学出版局, 1986.
- 5) 前掲書2): 156-157.
- 6) Hill, E. M., Stoltenberg, S. F., Bullard, K. H., et al.: Antisocial alcoholism and serotonin-related polymorphisms: association tests. *Psychiatr Genet.* 12(3): 143-53, 2002.
- 7) 河野裕明: アルコール依存症は治る, 52-58, 大和出版, 1997.
- 8) Paolino, T. J. Jr., McCrady, B. S., Diamond, S.: Statistics on alcoholic marriages: an overview. *Int J Addict.* 13(8): 1285-93, 1978.
- 9) Katz, J., Arias, I., Beach, S. R., et al.: Excuses, excuses: accounting for the effects of partner violence on marital satisfaction and stability. *Violence Vict.* 10(4): 315-26, 1995.
- 10) Schwarz, J.C., Wheeler, D. S.: Dependency conflict, marital threat, and alcohol consumption in a middle-aged sample. *J Genet Psychol.* 153(3): 249-67, 1992.
- 11) Eells, M. A.: Interventions with alcoholics and their families. *Nurs Clin North Am.* 21(3): 493-504, 1986.
- 12) 大野佳枝: 断酒会既婚者の意識変容に関する実証的研究, アデクションと家族, 20(1), 66-74, 2003.
- 13) 杉山敏宏, 谷岡哲也 他: 断酒会会員の断酒に至る過程に関する実態調査, *The Journal of Nursing Investigation.* 6(2), 83-88, 2007
- 14) Rotunda, R. J., West, L., O'Farrell, T. J.: Enabling behavior in a clinical sample of alcohol-dependent clients and their partners. *J Subst Abuse Treat.* 26(4): 269-76, 2004.
- 15) 猪野亜朗: アルコール依存症と家族, 精神科, 7(2), 120-124, 2005.
- 16) 中柴満里, 保莉啓子, 森 千鶴: アルコール依存症患者の自宅退院を受け入れる家族の心理変化とその要因—妻と母親を比較して—, 第36回精神看護, 160, 2005.
- 17) 市川奈緒美, 園山純代, 小泉素子: アルコール依存で入院中の夫を持つ妻の思い, 第36回精神看護, 99-

- 100, 2005.
- 18) 大野佳枝：前掲論文12)
- 19) 方 仁成：断酒会におけるアルコール依存症者の回復過程，心理臨床学研究，24(4)，464-475，2006.
- 20) Lloyd, G.: Alcohol Alcohol. One hundred alcoholic doctors. a 21-year follow-up. 37(4) : 370-4，2002.

*Relationship between alcohol abstinence and marital status in members of “Danshu-kai” (Japan Sobriety Association),
Part I: problem behavior by drinking*

Toshihiro Sugiyama¹⁾, Mutsuko Kataoka²⁾, Tetsuya Tanioka³⁾, Fumiko Hashimoto⁴⁾,
Hideshi Katayama⁵⁾, and Seiji Yoshida⁶⁾

¹⁾Department of Nursing, Ashikaga Junior College, Tochigi, Japan

²⁾Zentsuji Nursing School, National Hospital Organization Zentsuji National Hospital, Kagawa, Japan

³⁾Department of Health Sciences, the University of Tokushima, Tokushima, Japan

⁴⁾Department of Nursing, Tokushima Bunri University, Tokushima, Japan

⁵⁾Daiichi Hospital, Tokushima, Japan

⁶⁾Aizato Hospital, Tokushima, Japan

Abstract

AIM: Alcoholism is a relevant problem in public health. Family intervention is a necessary condition for the complete recovery of the alcoholic and their partners. The family system is a more powerful force than the addiction itself and has great potential for overcoming or sustaining the alcoholism. The purpose of this study was to investigate the relationship between the marriage status and the problem associated with alcohol dependence and abstinence.

METHOD: A mail survey and/or a placement method survey of alcohol dependency were conducted in two prefectures. Subjects were 294 recovering alcoholic and they were members of “Danshu-kai” (Japan Sobriety Association) for total abstinence. The response rate was 56.8% (150 males, 17 females). Survey contents were a marriage status, problem associated with alcohol dependence, and items related to continue abstinence.

RESULTS: In the item of problem behavior (fight or a problems with police) by drinking ($\chi^2=3.98$, $P<0.05$) and belonging to the Danshu-kai and the other group ($\chi^2=4.00$, $P<0.05$), there were many replies of unmarried people significantly compared with married people.

CONCLUSION: The findings suggest that alcohol-dependent clients' partner was repressing or adjusting the alcohol problems in the case of the married person, the unmarried person belonged also to the Danshu-kai and the other group as a device to continue abstinence.

Key words: marital status, alcohol addiction, “Danshu-kai” (Japan Sobriety Association)